

かにできた。しかし放流ウニの主体である殻径10~30mmの稚ウニについては発見数が非常に少なく、その生態については殆どわかっていない。このサイズの生態に関する情報は、適正な放流場所を選択する際の重要な情報となるので、今後30mm以下の稚ウニについての調査を行い、それらの生息環境を明らかにする必要がある。

2) 資源量推定

目 的

調査海域である今帰仁村古宇利島南海域の漁場及び周辺海域のシラヒゲウニ資源量をモニタリングし、資源に対する漁業の影響・放流効果を把握する。

材料と方法

今帰仁村地先のウニ漁場周辺海域に緯度・経度0.3分間隔で15定点（表7）を設けて、ウニ漁期前の2001年5月16日~23日とウニ漁期後の同年9月17日~26日の2回、シラヒゲウニの生息密度を調べた。調査定点は、ハンディ型GPS、JRC製JLR-4400を用いて位置を決定し、そこから南方向に100mの調査ラインを設置した。2名の調査員がスキューバ潜水により、調査ラインの左右各1m

以内に生息するシラヒゲウニの個数を計数するとともに、ノギスにより殻径を測定した。生息密度は、調査範囲200m²内に生息するシラヒゲウニの個数から求めた。また資源量の推定は、まず各定点の生息密度とその定点を中心とする区画の面積（275,000m²）から各区画の生息個数を求め、次いで全区画の生息個数を合計した。

結果と考察

5月の調査ではシラヒゲウニ生息密度はSt.Nで0.30個/m²、St.E5で0.21個/m²であったが、他の定点では0.1個/m²以下であった（図20）。全定点の平均密度は0.052個/m²であった。推定資源量は、204,188個であった。また、9月の調査では生息密度はSt.B2で0.29個/m²、St.F1で0.12個/m²であったが、他の定点では0.1

表7 シラヒゲウニ資源量調査地点

調査定点	(日本測地系)	
	北緯(26°)	東経(128°)
N	41.3'	0.3'
B2	41.4'	1.45'
C1	41.7'	1.75'
D1	41.7'	2.05'
D3	41.1'	2.05'
E1	41.7'	2.35'
E2	41.4'	2.35'
E3	41.1'	2.35'
E4	40.8'	2.35'
E5	41.7'	2.35'
F1	40.6'	2.65'
F2	41.4'	2.65'
F3	41.1'	2.65'
F4	40.8'	2.65'
F5	40.5'	2.65'

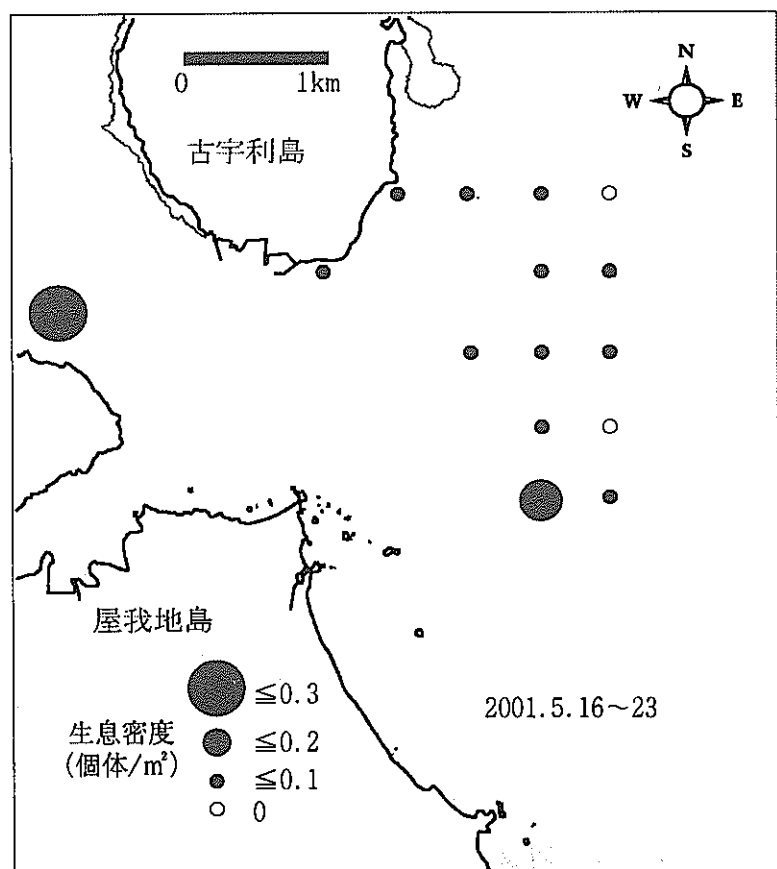


図20 シラヒゲウニの分布と生息密度（2001年5月）